

日本ロレンス協会ニューズレター No. 40

2021年4月27日

日本ロレンス協会会長
田部井 世志子
日本ロレンス協会副会長
石原 浩澄

第52回大会のお知らせ

会員の皆さまにおかれましては、お変わりなくご健勝のことと存じます。さて、2021年度の日本ロレンス協会第52回大会は、本来であれば鳥飼真人先生のご尽力で6月19日（土）、20日（日）に高知県立大学永国寺キャンパスで開催する予定でしたが、オンラインでのライブ開催に変更させていただきたいと思っております。3月末の段階で会場校の方針に従って開催方法を決定しようということになっていましたが、まだまだ先行きが不透明なこともあり、先日、高知県立大学の役員会にて、キャンパスの外部への貸出禁止期間を9月30日まで延長する基本方針が出されたため、このような決定に至りました。皆さまに直接お会いできないのは残念ですが、オンライン開催を従来の大会と同様、有意義なものにするために、執行部一同、当日の具体的な段取りを今後詰めて参る所存です。皆さまのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

オンライン開催にあたってはZoomを利用する予定です。大会のための招待メールの送信日程をはじめ、大会当日の段取り等々については、大会が近づいてきましたら、一斉メールとホームページを通じて皆さまにお知らせいたします。また発表者、企画に関わってくださる方々と当日に備えてリハーサルを実施する予定です。日程等、リハーサルの具体的な段取りが決まりましたら皆さまに連絡いたしますので、オンラインでの視聴に不安をお持ちの一般会員の方々も、この機会にぜひ接続をお試しく下さい。

今年度の「第52回大会」は1日目に1名の研究発表とシンポジウム、そして2日目にはワークショップを計画しております。概要は以下の通りです。

まず1日目の6月19日は、大江公樹氏（早稲田大学大学院生）による「*Lady Chatterley's Lover*における『純粋』の探求」という題名の発表から始まります。*Lady Chatterley's Lover*において、コニーによる愛の探求を描写する際、「純粋な (pure)」あるいは「純粋 (purity)」という言葉、あるいはそれらに関わる表現が用いられている点に着目し、本作品における「純粋」という概念の役割を検討し、宗教的文脈を意識しつつ、「純粋」を希求するロレンスの思想の方向性を明らかにすることに挑戦なさいます。発表の司会を務めてくださるのは糸多郁子氏（桜美林大学教授）です。

研究発表に続いて、「アフター・ロレンス——『共通文化』にむけて」という題目で井出達郎氏（東北学院大学准教授）の司会によるシンポジウムが行われます。目的は、従来のモダニズム研究から脱した木下誠氏（成城大学教授）の著書『モダンムーヴメントのD・H・ロレンス——デザインの20世紀／帝国空間／共有するアート』（2019年）を出発点に、「共通文化」¹へと向かっていった「アフター・ロレンス」を考えることで、ロレンスの重要性を提示することにあります。木下氏による著作の概要、及びその「共通文化」との結びつきの説明後、3人の講師陣が「アフター・ロレンス」の具体例を提示なさいます。井出氏は「英文学」という境界を超え、ロレンスの影響が見られるアメリカ人作家ヘンリー・ミラーの『北回帰線』（1934年）を扱い、ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』も取り上げながら、両者が生の有機体化への問いを共有しており、ミラーの作品がその系譜上にあることを明らかになさいます。次の講師、廣瀬絵美氏（日本女子大学大学院生）は1950年～60年代のイギリスのフォークリヴァイヴァル運動において主導的な役割を果たした音楽民俗学者・フォークシンガーであるA・L・ロイドを取り上げ、彼の炭坑歌収集における一連の活動や思想、歌を検証し、彼がいかに炭坑歌を「共通文化」として継承しようとしたのかを考察することで、彼をロレンス以後の重要な文化運動家として位置づけられます。最後に木下氏は、「共通文化」としてのロレンスのテキストの可能性を、反復を多用する彼の文体を足がかりに探り、それが生み出す意味作用の揺れを〈余地＝あそび〉と捉え、それがアントニオ・ネグリ等の構想である「〈共〉という富」の収奪を目論むグローバルな力との闘争であることを追究なさいます。従来の「モダニズムのロレンス」との対照を明確にするため、浅井雅志氏（京都橘大学名誉教授）にコメンテーターという立場で参加していただくことになっています。お楽しみに！フロアを交えた活発な議論を期待しています。

続いて総会を開きます。多くの会員の出席をお願いいたします。

2日目は新しい企画として学生参加型のワークショップが開催されます。心機一転、新たにロレンスに向き合うにつけ、「今、ロレンスにどうアプローチできるか」をテーマに、中林正身氏（相模女子大学教授）を中心に、岩井学氏（甲南大学教授）、高村峰生氏（関西学院大学教授）が高知県立大学の学生さんたちと一緒にロレンスを読み、味わい、彼／彼女らに向けてロレンスを発信なさいます。3名の講師陣が扱われる作品は、それぞれ『チャタレー夫人の恋人』、『虹』、そして「ハミングバード」の詩です。これまでになかった企画でロレンスと向き合ってください。どのようにロレンスを紹介し、ロレンス文学のテキストにアプローチをなさるのか、乞うご期待！！ 現在、学生さんを募集中とのことです。具体的な実施方法等についても検討いただいています。大会開催予定日（6月20日）までに、ホームページと一斉メールでご報告いたしますので、ご確認のほど、よろしくをお願いいたします。

¹ ここでいう「共通文化」とは、特権的な集団による文化の占有に抗い、文化を「ふつうの」ものと捉え、社会の成員の参加によって作り出され、社会に変化をもたらすものと捉えるレイモンド・ウィリアムズ概念を下地におかれているそうです。

今年は一リアルタイムとはいうもののオンライン開催ということもあり、また、懇親会を実施しないことになったため、葉書による出欠の確認はいたしません。皆さまの積極的なご参加をどうぞよろしくお願いいたします。

その他、協会事務局より、幾つかのお願いと報告をさせていただきます。

1. 今後、大会を Zoom で実施するにあたり、具体的な開催手順等々、逐次ホームページと一斉メールで情報を共有させていただきたいと考えています。メールアドレスをご登録いただいていない方はホームページへのアクセスをどうぞよろしくお願いいたします。
2. 会費納入は同封の郵便振替用紙をご利用ください(手数料は協会負担)。会費は、一般会員は 5,000 円、役員は 10,000 円(但し顧問と退職した役員は 5,000 円)です。永久会員の制度があります。詳細についてはホームページ(<http://dhlsj.jp/dl/syushin.pdf>)をご覧ください、ご活用ください。
3. 同封の会員名簿の住所・所属、e-mail、電話番号等に変更がある場合は、同封の返信葉書でお知らせください。
4. 第 15 回国際ロレンス学会(15th INTERNATIONAL D.H. LAWRENCE CONFERENCE、タイトル:“LAWRENCE'S 1920s: NORTH AMERICA AND ‘THE SPIRIT OF PLACE’”) 1 年延期されて今年の 7 月にタオスで開催される予定でしたが、2022 年 7 月まで更に 1 年延期されることになりました。その代わりに今年は 7 月 12~14 日にかけて Virtual Symposium が“D. H. Lawrence, Distance and Proximity”というテーマで開催されることになりました。その他、詳しい情報については DHLSNA (D. H. Lawrence Society of North America) のホームページをご確認ください。サイトは <http://dhlsna.bravesites.com/> あるいは <https://www.dhlconf2020.org/> です。
5. 昨年度の大会終了後、臨時役員会、臨時拡大執行部会議を開き、以下の内容をご議論いただきました。ここにご報告させていただきます。

臨時役員会議(メール会議)(2020年10月20日~27日)

議題: 今年度の『D. H. ロレンス研究』第 31 号について(本年度の会誌の出版見送りについて)

- ・今年度の第 31 号は出版せずに、次年度の第 32 号との合併号とする可能性を検討した。
- ・今年度は皆さまの業績に加えて、協会としても異例の形ではあったが皆さまのご協力のおかげで何とかヴァーチャル大会(研究発表)も実施できた。出版をしないと紙ベースでは残せないが、ホームページに載せるなどの工夫をすることで、これらの業績や事績等の記録を今年度の活動実績報告として残してはどうか。具体的にどの部分を今号として残すのかについては今後検討する。

拡大執行部会議(2020年12月20日)(Zoomによる遠隔会議)

議題 1. 2021 年度大会の開催について

- ・実施延期となったシンポジウムやワークショップを今年度は実施する方向で検討することを確認した。
- ・コロナ感染の収束が見込めない中、移動や集会に対する個々の認識にも違いがあることが想定され、かつ、不確実な要素を抱えたままでの大会準備には負担も大きいことから、オンライン開催（Zoom 開催）を原則として準備を進めることを確認した。
- ・ただし、高知県立大での対面での実施（Zoom と組み合わせた「ハイブリッド型」）の可能性についても、開催校での施設条件・施設の使用許可等を踏まえて、3 月末の時点において判断することとした。
- ・グループワークを取り入れることが想定されている「ワークショップ」の実施形態については開催校ならびに世話人を中心に、検討課題として詰めていくことを確認した。
- ・その他、オンライン実施にあたり、大会でのシンポジウム、ワークショップを含む発表者、司会者、Zoom での参加に不慣れな会員のために、早めの周知ならびに予行演習なども行っていくことの必要性が確認された。

議題 2. 関東地区評議員選出の件（欠員補充について）

- ・関東地区 1 名の補充をすることを確認した。

議題 3. 学会誌次号の発刊について（合併号の可能性）

- ・次年度号を「31 号・32 号合併号」として刊行することを原則とする（過去に合併号の先例あり）。
- ・編集委員会において、何を残していくか（発表報告要旨、研究文献一覧、編集後記など）を検討し、最終的には会長・副会長を中心に執行部で、公表の範囲ならびに方法（「ニューズレター」、「事務局からのお知らせ」など）を確定していくこととした。（→ 最終的にホームページの「『D.H.ロレンス研究』」→「2021」の中に「『D.H.ロレンス研究』第 31 号刊行に代えて」と題してアップすることに決定した。）

議題 4. 「（常勤ではない方に）書評をお願いする際の書評図書の扱い」について（編集委員会関連）

- ・原則、協会が図書を用意する、ということを確認した。

最後になりますが、今年度も大会実施に向けて新たな試みのために執行部をはじめ多くの皆さまのご協力をいただいております。改めて心からの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

この 1 年間、コロナ禍の中で、鬱屈した日々を送られていたのではないかと思います。今年は Zoom の画面上ではありますが、6 月の大会で皆さまとお会いできるのを楽しみにしております。皆さまの積極的なご参加をどうぞよろしくお願いいたします。